

ずいひつ ①

Z U I H I T U



京都を再生と飛躍に導いた琵琶湖疏水

京都市公営企業管理者
上下水道局長

吉川 雅則

みなさん、「琵琶湖疏水」のことをご存じでしょうか？単なる人工の運河ではありません。明治維新における事実上の東京遷都によって衰退の一途をたどっていた京都を再興させた一大プロジェクトが琵琶湖疏水の建設でありました。

第三代京都府知事、北垣国道が建設工事の責任者に選んだのは、最先端の知識を学んでいた弱冠21歳の田邊朔郎。建設工事には、延べ400万人の作業員が動員され、当時国内最長となる2.4kmの第1トンネル掘削において、日本で初めて堅坑工法を採用するなど、技術面でも進取の精神が取り入れられています。また、すべてを日本人の手で行ったわが国最初となる大土木工事でもありました。こうして、明治23年に完成した第一疏水は、日本最初の事業用水力発電や路面電車の開業のほか、舟運、防火、庭園への活用など、経済や産業、文化を大きく発展させることとなったのです。その後、毎年増大する電力

需要に対応するため、また、地下水に頼っていた飲料水の質・量を確保するため、第二疏水が建設、明治45年には「急速ろ過」方式を日本で最初に採用した蹴上浄水場が完成、京都市の水道事業の始まりです。

そして、時が過ぎ、平成30年、私たち京都市上下水道局は、明治期の壮大な志を胸に刻みつつ、多くの関係者のご尽力により、数々の課題を乗り越え、途絶えていた舟運を観光船「びわ湖疏水船」として67年ぶりに復活させました。以来、琵琶湖疏水の「歴史と魅力をまるごと体感できる」と、年間乗船率9割を超える人気をいただいております。

京都の近代化は、琵琶湖疏水があってこそであり、もしなかったら、文化、観光、学術、産業といった、多彩な顔を持つ京都市の現在の姿はなかったかもしれません。水道事業においても、琵琶湖疏水のおかげで、人口147万人の水需要に対し、安定供給ができております。世界的にも稀有な都市づくりの源流で、昨年、文化庁の「日本遺産」にも認定された「琵琶湖疏水」。その魅力は、時を超え、今に脈々と息づいています。



おいしい水道水で美味しいコーヒーを！

大阪広域水道企業団
副企業長

松本 竜三

このタイトルは、平成28、29年度に実施した水道水のPR事業「利き水会⁺(プラス)」のキャッチコピーです。平成23年4月から旧大阪府水道部の事業を承継してスタートした当企業団は、知名度不足に悩むとともに減少を続ける水需要に危機感を持っていました。そこで、「水道水の魅力再発見」を目的に、民間企業とタイアップしそのブランド力を活用することで、水道水のおいしさをPRし、知名度アップと収益確保につなげようと企画したものです。

水道水の利用促進の観点からは、利用量の多い風呂や洗面をテーマにした方が効果的かもしれませんが、『水道水もおいしいやん』と気付いてもらうことで、水道水そのものの価値を向上させることが重要と考え、飲み物、中でも多くの人が飲むコーヒーとコラボすることに決めました。

そこで、大阪府が地域資源としてブランド化している「大阪産(もん)名品」に認証されているコーヒー会社に協力を依頼したところ、イベントでの共同出店が実現しました。イベントブースでは、同社のバリスタに水道水でハンドドリップしたスペシャルティコーヒーを販売していただき、職員が、購入者に水道水で淹れたことを伝え、水道水をそのまま利用してもおいしいということを実感してもらうことで、イメージアップを図りました。新しいことにチャレンジできたことはとても楽しかったですね。

ところで、私事になりますが、この企画をきっかけに、「チームSuidou 珈琲研究会」を立ち上げ、コーヒーをこよなく愛する企業団内外の仲間と活動(飲み会!?)をしています。新型コロナウイルス感染症の影響で活動は休止を余儀なくされていますが、各自が思い思いにコーヒーを楽しんでおり、私は時々ですが自宅で焙煎をしています。

これからも好きなコーヒーを通して、水道のPRを続けていければと考えています。